

46. 生活習慣病予防の保健指導における 保健師のジレンマとその対処過程に関する研究

- 篠岡有雅（香川県綾川町役場）
大西美智恵（香川大学医学部看護学科）
辻 京子（四国大学看護学部看護学科）
梅田弥生（徳島県保健福祉部医療政策課）

【 研究目的 】

特定健診・特定保健指導が開始され5年が経過し、より効果的な健診・保健指導を行うために、保健師には様々な能力が求められている。しかし、保健師は様々なジレンマを抱えながら事業に取り組んでいる。そこで本研究では保健指導に従事する保健師がもつジレンマとその対処過程を明らかにすることで、より効果的な保健指導を行うための示唆を得ることとした。

【 研究の必要性 】

糖尿病等の生活習慣病有病者及び予備群を減少させることを政策目標として、平成20年4月より医療保険者に特定健診・特定保健指導の実施が義務付けられた。実施から5年が経過し、より効果を上げるために保健師には様々な能力が求められている。ところが特定健診・保健指導に従事する多くの保健師は、重要な役割を担う中で、事業実施や評価、援助技術等に対し様々なジレンマを抱えながら事業に取り組んでいる。しかしそれらのジレンマを持ちながらもうまく乗り越え、課題に対処し、効果的な或いはオリジナリティのある事業展開をしている保健師も存在する。そこで、保健指導に従事している保健師が、どのようなジレンマを抱えているか、そしてその対処過程を明らかにすることで今後の効果的な保健指導、さらには保健活動への示唆を得ることができると考える。

【 研究計画 】

研究デザインは、半構造的面接法による質的記述的研究である。研究方法は、研究協力者を特定保健指導に従事している或いは従事した経験があり、職域団体等から地域保健活動を積極的に実践しているとの紹介を得た者とした。データ収集は、保健指導に対しどのように考え実践してきたかという過程をインタビューし逐語録を作成した。分析方法は類似したデータをコード化し、カテゴリーを生成した。研究の真実性については専門家や他の研究者と検討することで高めた。なお、ジレンマを保健師の気持ちに割り切れない思いがくすぶっている状態と定義した。

倫理的配慮として、協力者に対して研究の趣旨、匿名性の確保、データ管理方法等を書面と口頭で説明し、同意書への署名をもって承諾を得た。

【 実施内容・結果 】

インタビューは、2013年12月～2014年3月に実施した。協力者の内訳は3県の市町保健師7名、年齢は40歳代前半～50歳代後半で保健師経験年数は21年～36年であった。

分析テーマをジレンマがあったけれども対処できたプロセスとその背景とした。分析の結果、9つのカテゴリーと27のサブカテゴリーが抽出された。(表1)

表1 分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー
制度の変化に対して抱く疑問や違和感	活動の対象者を限定することに疑問を感じる
	目先の手段にとらわれることが問題だと思う
	定められた枠で動くことへの違和感をもつ
職場で感じる考え方の違い	重点業務に関する考えの差を感じる
	複数の課にまたがる事業実施に苦労する
あるべき姿のゆらぎ	制度や流れに翻弄される
	保健師の存在価値を喪失することへの危機感をもつ
従来の保健事業展開への不全感	個への保健指導に限界がある
	保健事業のあり方に疑問を持つ
施行の後に考え方を転向	違和感は感じつつもまずはやってみる
	制度の枠に固定しないで考え方を切り替える
住民主体の大局的な観点	住民にとって何が大事かを考える
	一人ひとりに丁寧に関わる
	先を見通して考える
	手段にとらわれない様にする
保健活動スパイラルの展開	地域全体をみる
	データを見て地域の課題を出す
	地域の課題や戦略を提案していく
	成果を見せる
	健診は手段であり活用する
	制度をうまく活用する
絶え間ない向上心と行動力	前向きに学ぶ姿勢を持つ
	保健指導のスキルをみがく
	同じ思いを共有できる仲間を持つ
保健師としてのアイデンティティ	保健師の存在意義を意識する
	保健師の役割を意識する
	保健師の専門性を生かす

以下にカテゴリーを『 』、サブカテゴリーを「 」で示し、まずは結果の全体像を説明する。

協力者である保健師たちは、定められた枠で動くことや、目先の手段にとらわれること、事業対象者を限定する等の『制度の変化に対して抱く疑問や違和感』を抱え、また『職場で感じる考え方の違い』から、制度や流れに翻弄される保健師の『あるべき姿のゆらぎ』を懸念していた。一方『従来の保健事業展開への不全感』を感じながらも、まずはやってみて『施行の後に考え方を転向』する。手段にとらわれず先を見通して住民にとって何が大事かをといた『住民主体の大局的な観点』から、地域全体を観る視点と PDCA サイクルに基づき『保健活動スパイラルの展開』をする。加えて前向きに学ぶ姿勢を持ち『絶え間ない向上心と行動力』で、同じ思いを共有できる仲間を持つ。そして確固とした『保健師としてのアイデンティティ』を持ち、保健師の専門性を活かし活動していた。

次にそれぞれのカテゴリーの内容について説明する。

1) 『制度の変化に対して抱く疑問や違和感』

生活習慣病予防に関する制度は老人保健法による保健指導から特定保健指導へと変わったことに対して協力者である保健師は、国保被保険者といった「活動の対象者を限定することに疑問を感じる」こと、保健指導の方法等が示されたことで「目先の手段にとらわれることが問題だと思う」こと、それらは自由裁量ではなく「定められた枠で動くことへの違和感をもつ」等の疑問を抱いていた。

2) 『職場で感じる考え方の違い』

職場内では、上司等との間に保健事業の中で何を重点事業とするかといった「重点業務に関する考え方の差を感じる」ことや、業務が保健担当課と国保担当課というように「複数の課にまたがる事業実施に苦勞する」ことを感じていた。

3) 『あるべき姿のゆらぎ』

制度が複雑に変わっていくことで、事務作業が複雑で解らないとか、今の現場と合わない等といった「制度や流れに翻弄される」感覚や、他職種も保健指導に関わることで保健師としての役割というものに対し「保健師の存在価値を喪失することへの危機感をもつ」といった不安や危機感を抱いていた。

4) 『従来の保健事業展開への不全感』

住民の健康行動を変えることについては、「個への保健指導に限界がある」ことや、保健指導や健康相談等、従来実施してきた「保健事業のあり方に疑問を持つ」といった不全感を感じていた。

5) 『施行の後に考え方を転向』

しかしながらも、協力者は「違和感を感じつつもまずはやってみる」と割り切り、事業を実施し、その中で「制度の枠に固定しないで考え方を切り替える」という思考の変化がみられていた。

6) 『住民主体の大局的な観点』

自分たちが対象にするのは住民であるといった「住民にとって何が大きかを考える」ことや「一人ひとりに丁寧に関わる」ことの大切さを意識しつつ、「先を見通して考える」ことで制度に対しても「手段にとらわれない様にする」という大局的な観点を持つようになっていた。

7) 『保健活動スパイラルの展開』

協力者は、対象者を限定せず「地域全体をみる」視点を持ち、他市町と比較をするなど「データを見て地域の課題を出す」作業を行い、その結果から上司等に「地域の課題や戦略を提案していく」ことをし、「成果を見せる」ことに取り組んでいた。そして「健診は手段であり活用する」というように、事業を一つのツールとして捉え、保健師は「制度をうまく活用する」ことであるべき姿を目指すというように、保健活動がスパイラル的に展開されていた。

8) 『絶え間ない向上心と行動力』

積極的に勉強会に参加したり視察に行く等、「前向きに学ぶ姿勢を持つ」ことで「保健指導のスキルをみがく」ことを常に心掛けていた。職場内でも「同じ思いを共有できる仲間を持つ」ことに絶えず努めていた。

9) 『保健師としてのアイデンティティ』

協力者は、行政保健師としての重要性や価値といった「保健師の存在意義を意識する」ことや、他職種と違うといった「保健師の役割を意識する」ことをとおして自信に繋げていた。そして「保健師の専門性を生かす」ことに力を注いでいた。

【 考察と今後の課題 】

1. 保健師が感じるジレンマの特徴

ジレンマを保健師の気持ちに割り切れない思いがくすぶっている状態と定義し分析した結果、研究協力者の保健師は様々なジレンマを感じていることが明らかになった。そのジレンマとは、保健指導業務に従事していく中で保健師と住民、保健師と上司、他の専門職や事務職、保健師間などの狭間で感じる組織的ジレンマや、制度の変遷とその対応において感じるジレンマであった。保健師活動で得た気づきや違和感は、地域の課題を洞察しているからこそ感じるものと言われている¹⁾。地域や住民の実態に即して、たゆまない努力と改善を日々の実践の中で展開している保健師ならではのジレンマであると考えられる。

2. ジレンマへの対処過程とその影響要因

今回の研究協力者は、それらのジレンマを多少なりとも感じつつ、上手く対処していることが明らかになった。その過程としては、まずは施行的に取り組みながらも常に住民に目を向け、制度の枠にとらわれず、むしろ制度を手段と捉え、将来の予測を立てることで乗り越えていた。この大局的な観点もてることによってゆるぎない保健活動の展開につながっていると考える。このように、保健活動の展開では、地域全体を捉え、データを見て地域の課題を見出し、その課題や戦略を提案し、事業の成果を見せていた。つまり、特定健診・特定保健指導を住民主体の健康づくりへと活用していた。これはまさに、厚生労働省の「地域における保健師の保健活動に関する指針」で示された保健師活動の本質と合致するものである。

また、協力者たちは常に住民に目を向け、住民の暮らしを守るためにという意識を強く持っていた。この住民と住民の暮らす環境をトータルに捉える活動こそが保健師活動の本質に繋がるものとする。

協力者である保健師は、絶え間なく自らの技術や能力を向上させることや、同じ思いを共有する仲間を持つことに努めていた。複雑で高度な保健分野の課題が指摘され、それらへの対応が求められる保健師にとって、自らの揺るぎないアイデンティティを持ち、学びを実践に結びつけ、仲間とともにジレンマを乗り越えていく過程こそが、本研究の協力者である保健師たちを誕生させた要因であるとする。

3. 効果的な保健指導への示唆

協力者たちは、住民個々に対する保健指導への限界や保健事業のあり方に疑問を感じつつも、援助技術を高め対応に努めていた。保健指導業務には他の専門職も関与する中で、保健師の役割や専門性とは何かを考え、保健師の存在意義を強く意識していた。そして、保健師ならではの視点で地域全体を捉えて活動し、政策提案していくといった役割を担うことに努めていた。

以上のことから保健指導を効果的に実践していくためには、個に対する援助技術を高めることも重要であるが、保健師は様々な制度を手段として捉え、上手く活用しながら、地域住民の生活実態や地域特性に応じた保健活動をスパイラル的に展開し、健康づくりをすすめるという保健師ならではの役割を担うことが重要であるといえる。

4. 今後の課題

今回の協力者は、保健師活動の本質に基づいた活動をしていた。住民を主体として地域全体を捉え、事業や制度の方向性を俯瞰的にみていくことができる能力はどのようにして身についたかは定かでない。今後は、俯瞰的に見る能力が身につく過程も探求していく必要がある。保健指導に従事している保健師の中には個別支援の対応で悩みを感じたり、制度に振り回され、事業をこなすことが精一杯という者も存在する。そういった保健師が俯瞰的な視点を持ち、保険活動を展開できるための人材育成という点においても、その過程を明らかにすることが必要である。

1) 中板育美：PDCA の日常化で保健師活動を「見せる」から「魅せる」へ、保健師ジャーナル、68 (5)、366-371、2012

【 経費使途明細 】

使途内容	金額	円
旅費（データ収集、打ち合わせ等）	192,570	
謝礼（調査協力者謝礼、茶菓）	19,925	
消耗品（用紙、インク、データ管理用品等）	46,394	
賃金（逐語録作成、分析協力者）	45,000	
計	303,889	